［プロジェクト］

収蔵品展の意図とプロセス

令和2年度収蔵品展『ミュージアム1940年代－1980年代：始原からの軌跡』より

遠藤康一*，木下紗耶子**，川向正人***

Purpose and Process of the Collection Show Case:

Year's Collection Show Case, "Museums by Japanese Architects 1940s–1980s: Origins and Trajectories"

Endo Koichi, Kinoshita Sayako, Kawamukai Masato

This paper is a report on the Year's Collection Show Case, "Museums by Japanese Architects 1940s–1980s: Origins and Trajectories" held at the National Archives of Modern Architecture, Agency of Cultural Affairs (Date: October 1st to November 15th, 2020). The purpose of this report is to document the process and outline of the exhibition planning. At the same time, through this exhibition, we will consider the possibility of disclosing the collection materials in the Architectural Archives.

キーワード：建築アーカイブズ、収蔵品展、展示企画：Architectural Archives, Collection Show Case, Curation

1. はじめに

本稿は、文化庁国立近現代建築資料館で開催された『令和2年度収蔵品展 ミュージアム 1940年代－1980年代：始原からの軌跡』（会期：令和2〔2020〕年10月1日～11月15日）における、展示企画におけるプロセス及び企画の概要に関する報告を行うことを目的としている。また同時に、本展を通じて、建築アーカイブズにおける収蔵資料の公開のあり方に関してその可能性を考察するものである。

2. 令和2年度収蔵品展の企画

2.1. 企画初期段階：コロナ禍の影響と収蔵品展企画

令和2年4月、国内における新型コロナウイルスの急速なまん延により、日本政府が緊急事態宣言を発出したことを受けて、多くの美術館・博物館が休館を余儀なくされた。国立近現代建築資料館（以下、資料館）においても、当初7月からの開催を予定し準備が進んでいた企画展示[1]について、令和3年度に延期する判断が下された。同時に、不透明な事態の先行きを睨みつつ、替わって新たな年度前半の企画展示[2]として、収蔵資料による展覧会企画（以下、収蔵品展）が秋口に行われることとなった。

本収蔵品展企画は、上述の通り、当初予定された企画展が延期されたことによる代替企画である。他方、資料館では年々増加する収蔵資料の公開・活用が運営上の課題となっており[3]、常設展示スペース設置の可能性と共に、収蔵資料を用いた定期的な展示企画の可能性が検討されつつあるタイミングと時を同じくして進行する性格のものでもあった。新規収蔵資料の紹介を中心とするものか、或いは、何らかのテーマに即してこれまでに収集された資料の中に関連性を見出すものとなるのか、企画の開始時点ではその方針も白紙であったことから、資料館における資料公開に関する基本的なアイデアを模索する試行的な役割が期待されていたと考えられる。

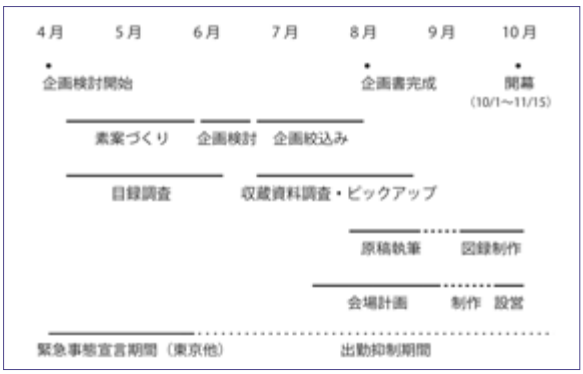


図1　収蔵品展タイムテーブル

企画開始時においては、まず資料館スタッフ[4]により企画素案づくりが行われた。この素案づくりの目的は、上述のアイデア模索と並行して、全収蔵資料目録を概観し、各資料群の構成（作品名、用途、年代、資料の種別）、デジタルデータの有無や収蔵状況といった資料へのアクセシビリティを共有することから、企画のテーマ設定

*元国立近現代建築資料館研究補佐員、宇都宮大学地域デザイン科学部建築都市デザイン学科講師、博士（工学）
**国立近現代建築資料館研究補佐員、修士（学術）　***元国立近現代建築資料館主任建築資料調査官、東京理科大学名誉教授、工学博士

の可能性と限られた期間での企画遂行の可能性を確認することにあった。

素案づくりは緊急事態宣言下の出勤抑制が開始した令和2年4月から約2か月間行われ、以下の7案が立案された[5]。

2020 収蔵品展等に向けた企画素案

1. 試行錯誤の住宅 ～近現代住宅資料にみる建築家の多面的な試み
2. 建築アーカイブズ～はじめまして編
3. つなぐ建築 ―それでも作るとすれば、何ができるか―
4. 「ここまで描くか！」ヒューマンスケールの描き込み
5. 広場／パブリックスペースのデザイン展
6. 建築文化と地域性
7. オンラインコンテンツの企画

この作業の結果、1970年頃までの近現代住宅における実験・思索的な試みに関するもの (1)、建築アーカイブズの対象となる資料の分類から建築資料とは何かを問うもの (2)、日常的な機能を超えた建築のあり方を探るも (3)、建築のドローイングの詳細な描写に着目するもの (4)、日本の建築空間における広場に関するもの (5)、建築表現と地域に関するもの (6)、資料公開の目的と手法を位置づけようとするもの (7) という、本収蔵品展に限らず、今後検討すべき課題を含む広範なテーマの可能性と問題意識を館内で共有することとなった。これらのうち、近現代住宅に対象を絞って企画検討が継続されたが、対象資料をリストアップする中で、資料公開に際しての個人情報の取扱いに関してクリアにすべき諸処の課題克服に要する作業を短期間で行うことは困難であるということが判明したため、実行可能なテーマを求めて企画検討が続けられた。

2.2. 企画内容の絞り込み段階：社会の状況との関わりの中で建築／建築アーカイブズの役割、意義を捉え直す

継続された検討においては、現在の社会状況における資料館の展示機能のあり方に焦点を当て、収蔵される資料群ごとに建築作品や年代、ビルディングタイプを対照することで企画の絞り込みが行われた。具体的には、新型コロナウイルスの影響により人々の活動に制約があるなか、展覧会に何を求めることができるかという問いを立て、それに対してミュージアム建築というビルディングタイプに着目した企画テーマの検討であった。

近年、メディアと美術館の共催により観客動員数を争う大型の展覧会が話題を呼んできた。入場を待つ人が長蛇の列をなし、展示物の前では折り重なるように群がる人々の頭越しに鑑賞するというこのタイプの展覧会の状況に対して、他方、その場所の経験や人々の活動を重視したものや、ミュージアムのコレクションを見つめ直す動きも見られている。そこで、新型コロナウイルスによる制約下にあって、改めてミュージアムのあり方を思考する、それを建築作品・資料から読み解くというテーマ設定の可能性について検討が行われた。

一方、資料館における建築資料の収集方針[6]は、体系化や網羅性を目的としたものでは無いことから、収蔵するミュージアム建築の資料も、建築家、時代において偏りが生じることが想定された。そこで全資料目録から該当するミュージアム建築[7]をリストアップした結果、1940年代－1980年代にかけて存在する図面やスケッチ等の資料から、それぞれ年代毎に特定の建築家による思考の痕跡、社会状況との関わりや技術的な側面について読み取りを進めることが可能であるとの結論が得られた。また同時に、資料間の関連性を軸とした批評的な性格を本収蔵品展に求めていくという目標が定められた。

企画の実現性とストーリーの検討を行う目的で、現物の資料の確認と発表された建築家のテキストを往復する作業が8月上旬まで続けられ、企画書が完成した。それと共に10月1日の開幕に向けて、会場計画、図録、展示解説文、オーラルヒストリーの収録といった本格的な作業が急ピッチで進められた。

3. 展示ストーリー

3.1. 展示の主旨

本展の展示主旨を下に示す。外出自粛により、社会が押し込められたような雰囲気に覆われるなか、人々が公園を散策するように自由に歩きながら鑑賞する、ミュージアムに本来的に求められてきた性質に立ち返り、その空間のあり方を探求することを意図したテーマが設定された。

近代建築運動の影響を強く受けた1940年代－1950年代を皮切りに1980年代までの収蔵されるミュージアム建築を、時代・社会の変化との関係を重ね合わせて見ていく。時代毎に展開する主題への取組みと、その根底にあるアイデアの関係から、4つの時代の切り分けが導かれる。さらに、スケッチ、変更が重ねられる設計図、実施設計、詳細図、家具図といった資料館に収蔵される建築資料から、着想時のイメージから実現に至る建築家の検討内容を具体的に読み取ることができる。

こうして得られた日本の近現代建築資料にみるミュージアム建築の諸相の一端を、「始原」からの「軌跡」と位置づけ、展示のストーリーが構成された。

新型コロナウィルス感染拡大防止の対策を講じつつ、令和2年度収蔵品展「ミュージアム 1940年代－1980年代：始原からの軌跡」を開催します。

ミュージアムは、ルネサンス期に、王侯貴族が蒐集した古代の彫像などを、庭園や歩廊（ギャラリー）に陳列し、それを歩きながら鑑賞して楽しんだところから、本格的に始まったと考えられています。その当初からミュージアムは、開放されて、公衆の芸術的感性を育む場として活用される傾向がありました。長くて、広さと高さもあり、おだやかに自然光が射す空間と、移動しながらの作品鑑賞。作品の保護を大前提としつつ、理想の距離・光・開放感・動線などが追求されてきたミュージアムが、今回のテーマです。

収蔵品展ですので、当館がすでに収蔵し、また収蔵の運びとなった図面・スケッチなどを用いての、日本人建築家の設計によって1940年代－1980年代に国内外で実現したミュージアムに関する展覧会となります。始原に立ちかえって、その本来のあり方を考える機会とするために、当展では、博物館・美術館・工芸館・歴史民俗資料館などを含み、広く展示空間を捉える概念として「ミュージアム」を用いています。

展示された図面やスケッチは、ミュージアム毎の、アイデアの具体化すなわち「始原からの軌跡」を視覚化するものでもあります。そこからは、理想のミュージアムの実現に向けて奮闘する建築家・建築構造家たちの熱い思いが伝わってきます。

この機会に、ぜひ当展に、また近隣のミュージアムに、足をお運びください。

（川向正人　主任建築資料調査官）

図2　展示主旨（チラシ）

3.2.　章構成

4つの時代の切り分けによる本展の章構成を示す。

第1章

近代美術館の誕生 1940年代－1950年代日本における戦後のミュージアム建築は、20世紀初頭の近代建築運動を推進した代表的建築家であるル・コルビュジエ（1887–1965）の〈無限成長美術館〉をプロトタイプとして展開した。その実現例のひとつとなる「国立西洋美術館」（1959）、彼の弟子である坂倉準三による「神奈川県立近代美術館」（1951）、吉阪隆正による「ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館」（1956）から、自然の光を取り入れ、外部環境と共生する戦後日本の近代美術館の息吹を読み取ることができる。

第2章　素材・技術からの課題の克服
1950年代後半－1960年代

日本各地でミュージアム建設が進む中、新たなミュージアムの空間性の模索と並行して、空間を形づくる素材や技術的側面における方法論が探求された。鉄筋コンクリートの構造体が「倉」のような大空間の展示室を支える「島根県立博物館」（1959、菊竹清訓）には「スカイハウス」（1958）と共通する空間システムが見られる。高橋靚一らによる「佐賀県立博物館」（1970）では、構造家木村俊彦との協働によりプレキャスト・コンクリートのグリッドシステムが自由な平面の広がりを獲得する。科学と工学技術の発展とミュージアム建築の空間表現の重なりを捉えることができる。

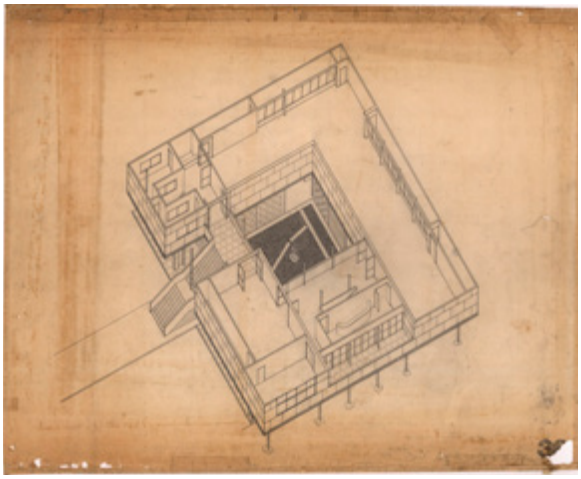


図3　神奈川県立近代美術館（1951, 坂倉準三）

第1章展示作品リスト
・レオナルド・ダ・ヴィンチ展（1942, 坂倉準三）
・神奈川県立近代美術館（現・鎌倉文華館 鶴岡ミュージアム、1951、坂倉準三）
・ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館（1956、吉阪隆正）
・国立西洋美術館（1959、ル・コルビュジエ、坂倉準三、前川國男、吉阪隆正）
・石橋文化センター・美術館（現・久留米市美術館、1956、菊竹清訓）

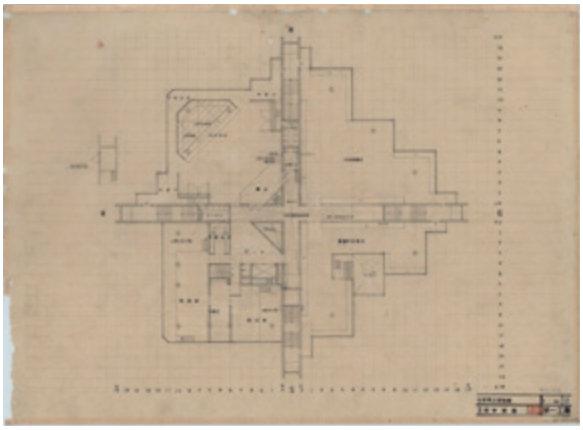


図4　佐賀県立博物館（1970, 高橋靚一／第一工房, 内田祥哉）

第2章展示作品リスト
・島根県立博物館（現・島根県庁第三分庁舎、1959、菊竹清訓）
・畠山美術館（計画案、1961–1963、菊竹清訓）
・佐賀県立博物館（1970、高橋靚一／第一工房、内田祥哉）
・佐賀県立博物館構造設計図（1970、木村俊彦）
・EXPO’70富士グループパビリオン（1970、村田豊）
・日本万国博覧会電力館（1970、坂倉準三）

第3章　地域のミュージアムへ：
風土／伝統、大屋根 1970年代

1920年代に確立されたモダニズム建築のスタイルに、

大高正人は風土／伝統を造形・技術・素材において融合的に取り込む方法論を見出そうとした。「千葉県立美術館」(1974)、「群馬県立博物館」(1979) では、傾斜屋根の採用、素材の活用等を通じて、地域文化、ランドスケープとミュージアム建築の関わりへの試行過程が認められる。

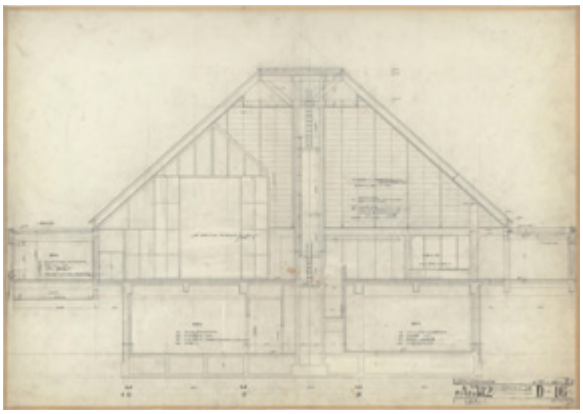


図 5　群馬県立歴史博物館（1979, 大高正人）

第 3 章展示作品リスト
・千葉県立美術館（1974、大高正人）
・群馬県立歴史博物館（1979、大高正人）

第 4 章　個性的なミュージアムへ：親自然、局所、世界、風景、1980 年代

1980年代、建築家が空間創造の新たな根拠を求める中、原広司は、人間の意識に働きかける〈様相〉としての建築、経験としての建築を模索する。世界の集落調査から得た〈世界風景〉という像を求めて、ミュージアム建築を環境との連続のなかに位置づける空間的な試み

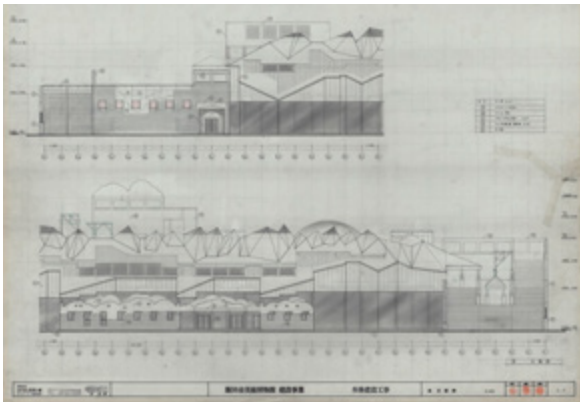


図 6　飯田市美術博物館（1989, 原広司＋アトリエ・ファイ建築研究所）

第 4 章展示作品リスト
・末田美術館（1981、原広司＋アトリエ・ファイ建築研究所）
・田崎美術館（1986、原広司＋アトリエ・ファイ建築研究所）
・飯田市美術博物館（1989、原広司＋アトリエ・ファイ建築研究所）

と共に、山並み、雲、樹影等の風景の形象を造形に表していく。

4. 会場計画、オーラルヒストリー

4.1. 会場計画

会場計画は、コロナ禍にあってソーシャル・ディスタンシングが求められていたことを考慮し、また個々の建築資料に鑑賞者が対峙する鑑賞空間とするために、展示点数を限定する方針で行われた。竣工時の空間構成を読み取ることができる基本図を中心に、設計過程を示すスケッチ、計画案、空間表現を支える詳細図等が抽出され、限られた図面から多様な読み取りが可能な構成となった。

4.2. オーラルヒストリー

資料館ではこれまで建築家や関係者へのインタビュー記録をとり「オーラルヒストリー」として展覧会などの機会に公開してきた。本展では、ミュージアム建築を多数手掛けてきた青木淳 (1956–) と原広司 (1936–) にインタビューを行い、展示会場とウェブサイトにて公開した。

両者にインタビューを依頼した理由は次のようなものであった。第一に、時代を画する特色あるミュージアム建築を設計していること。第二に両者の仕事および言葉を記録することが、現代ないし将来のミュージアム建築の在り方を考察するうえで重要な参照項になりうると考えたからであった。

青木が携わったミュージアム建築は潟博物館 (1997) や青森県立美術館 (2006) などが知られる。また京都市京セラ美術館の改修・リニューアルオープンに伴い、青木は2020年に館長に就任した。インタビューでは、建築家として、そしてコロナ禍の影響を受けながらの出発となった館長としての両面から話を聞くことができた。

インタビューにおいて、青木は、明治以降の日本のミュージアム施設の歴史を振り返り、一時的な見世物としての陳列ではなく、コレクションを核とした展示活動に立ち戻ることの重要性を指摘した。そのうえで、21世紀のミュージアムとして、モノを作り活動する現場としての在り方を提言し、「モノを作る猿」としての人間の始原的な姿に働きかけることが、ミュージアムの存在意義を確かなものにしていくとする。そのようなミュージアムは、完成した作品を見る場としての静的なものではなく、今日的な視点から継続的に働きかけることのできる現在進行形の場でもある。また、鑑賞体

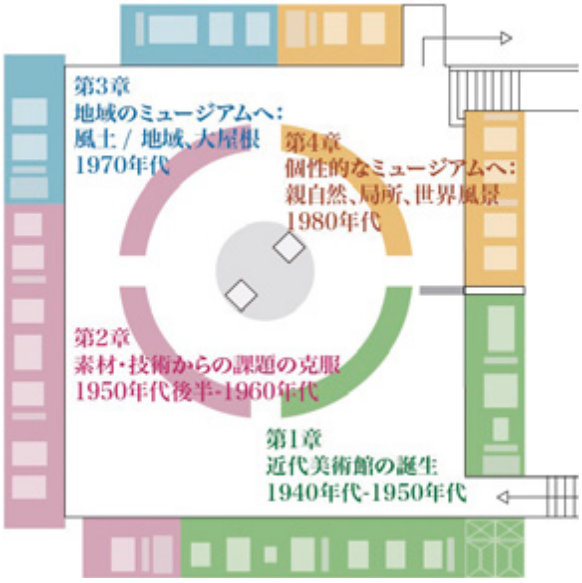


図７　会場構成

図８　会場風景

験でも決められた動線をなぞることとともに、歩く楽しみのなかに作品に出くわすという「散歩道を作る」ような鑑賞もまたミュージアムの魅力である。

作ること、そして散歩することの楽しみに開かれた青木の構想するミュージアムは、動員数だけを指標とするのではない、人々の多様な関わり方を受け止め、そして活性化するものである。建築を設計することと、建築を人間が活動するための場ないし道具として活かしていくことを連続的に捉える視点性のなかから、新しいミュージアムの在り方が目指されている。

原は、末田美術館、田崎美術館、飯田市美術博物館の設計過程について、施主や技術的な協力者との協働や地形・気候・展示作品との関わりから、建築を構想し成立させていく過程を語った。これらのミュージアム建築は原の70年代の住宅建築群と90年代の大規模なプロジェクトとの、時期および規模の中間に位置しており〈様相〉の概念が組み立てられる時期と重なる。

末田美術館は住宅兼アトリエ、展示施設であり、集落調査や自邸の設計からの延長として設計された。田崎美術館では田崎廣助が描いた山の絵画を自然光の中で見せることを意図した。また、モダニズム建築が前提とする均質空間に対して、空間の現象全体を「様相」ととらえ、一期一会のものとして現れる建築を設計しようとした。飯田市美術博物館は、伊那谷から見る山の形やそこにかかる雲の形象を踏襲して設計された。原は同敷地内への柳田國男館の移築にも尽力し、日夏耿之介記念館を含めた展示施設は小道によって接続され、地域の歴史や芸術・自然科学を包括する一帯が作られた。

原は、ミュージアム建築を通じて、土地や収蔵品と密接に結び付きながら構想される建築の在り方を模索した。ミュージアムを訪れる経験は、展示室内のみで完結されず、建築の内外を歩き、その時間のなかで体験される気候や風景の様々な変化とともにある。自然現象と応答する建築においては、作品鑑賞の経験が何度でも刷新される可能性をも設計することが試みられている。

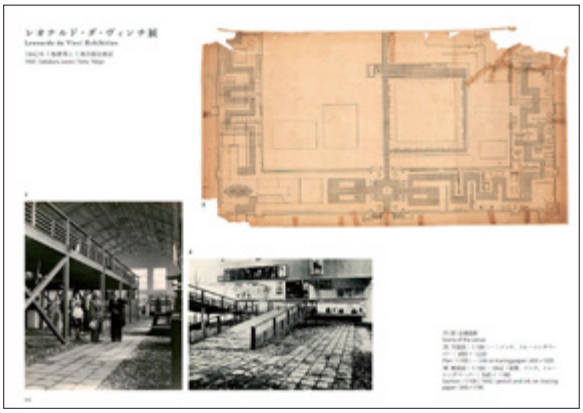
4.3. 図録

本展の図録[8]は全36頁、展示した16つの建築プロジェクトのなかから41点の図面、及び一部建築の記録写真を掲載した。各章、各建築プロジェクトの解説文は日・英二か国語とした。資料館では展覧会毎に図録を制作してきた。本展の図録もこれまでの形式を継承し、会期中は展示を見る際の補助資料であるとともに、会期後は、展覧会記録となるよう展示した資料や解説を可能な限り盛り込んでいる。図録は、現在も当館で配布するとともに、当館ウェブサイトで公開している。

5. おわりに

以上、本稿では、『令和2年度収蔵品展 ミュージアム 1940年代－1980年代：始原からの軌跡』の企画プロセスと企画概要を中心に報告した。展覧会の企画内容は一義的には展示資料そのものに由来するものである

が、資料を抽出し配列することによって、企画のタイミングと対象とする建築作品が設計された時代というふたつの時間における、社会の状況やそれへの眼差しが相対的に位置付く、意味空間が生まれる（その詳細は、頒布されている図録にて是非ご確認いただきたい）。建築作品においては、資料相互から読み取れる情報は多岐に亘ることから、従って、展覧会企画の大半はその峻別作業に当てられることとなるが、その作業にこそ収蔵品展のひとつの意義を認めることができる。本展は、次々と運び込まれる収蔵資料を整理し活用に供すること、それを批評行為に接続するという、建築アーカイブズの可能性への試行と位置づくと考える。



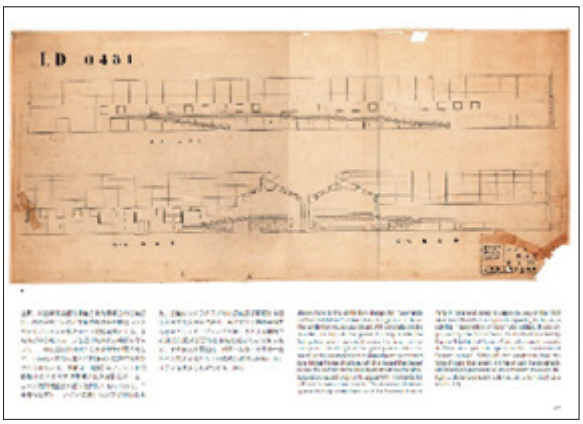


図９　図録より

注

1　令和２年度に予定されていた企画展『丹下健三 1938–1970　戦前からオリンピック・万博まで』は、令和３年度に延期された。

2　文化庁国立近現代建築資料館では、平成25（2013）年の開館より年間２回の企画展が開催されている。令和２年度収蔵品展は平成29年、平成30年に続く、三度目の収蔵品展である。

3　令和２年２月、国立近現代建築資料館運営委員会第13回企画小委員会で、所蔵資料を展示するための常設コーナー設置についての意見提出があった。それを受けて３月第14回運営委員会において、将来的にロフト部分において新収蔵品展示コーナーの設置を検討する旨が報告された。

4　文化庁国立近現代建築資料館の研究部門は、館長・副館長以下、３班（企画・収集・情報）が設置され、それぞれ主任建築資料調査官１名、研究補佐員１～２名が配置されている。本企画開始時には全研究補佐員が部門を横断して企画素案の立案に関わった。

5　立案：遠藤康一、木下紗耶子（企画班）、加藤直子、寺内朋子（収集班）、飛田ちづる（情報班）、2020.05

6　文化庁国立近現代建築資料館の収集方針は「我が国の近現代建築に関し、国内外で高い評価を得ている又は顕著に時代を画した建築・建築家に係るもの、又は、我が国の近現代の建築史や建築文化の理解のために欠くことができず、かつ、歴史上、芸術上、学術上重要なもののうち、散逸等のおそれが高く、国において緊急に保全する必要のあるものとする」とされている。

7　本展においてミュージアム建築とは、博物館・美術館・工芸館・歴史民俗資料館などを含み、広く展示空間を捉える概念としている。

8　文化庁国立近現代建築資料館令和２年度収蔵品展図録『ミュージアム 始原からの軌跡：1940年代－1980年代』文化庁、2020.10.1

（2021年５月31日原稿受理）

第1章　近代美術館の誕生　1940年代–1950年代

レオナルド・ダ・ヴィンチ展｜1942年｜坂倉準三｜東京都台東区

1. 配置図	1:300	1942	鉛筆 色鉛筆 インク、和紙	568×745
2. 平面図	1:100	-	インク、トレーシングペーパー	655×1220
3. 断面図	1:100	1942	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	545×1190

神奈川県立近代美術館（現・鎌倉文華館 鶴岡ミュージアム）｜1951年｜坂倉準三｜神奈川県鎌倉市

1. 配置図	1:300	1950	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	420×555
2. 一階平面図	1:100	1950	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	515×611
3. 断面図	1:200	1950	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	254×515
4. 展示室散光ルーバー 詳細図	1:200 1:50 1:20 1:1	1950	鉛筆、トレーシングペーパー	403×545
5. 立面図	1:200	1950	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	397×510
6. アクソノメトリック図	-	-	鉛筆、トレーシングペーパー	567×693

ヴェネチア・ビエンナーレ日本館｜1956年｜吉阪隆正, 大竹十一｜イタリア, ヴェネチア

1. 上階　アクソノメトリック図	-	-	鉛筆、トレーシングペーパー	550×805
2. 地上階　アクソノメトリック図	-	-	鉛筆、トレーシングペーパー	563×804
3. スケッチ（展示室空間の検討ダイアグラム）	-	-	鉛筆 色鉛筆、トレーシングペーパー	430×373
4. 断面図	1:50	-	鉛筆、トレーシングペーパー	514×836
5. 地上レベル図	-	1956	鉛筆 色鉛筆、トレーシングペーパー	603×804
6. 詳細図	1:20	1984	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	885×625

石橋文化センター・美術館（現・久留米市美術館）｜1956年｜菊竹清訓｜福岡県久留米市

1. 二階平面図	1:100	1955	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	539×792
2. 北側・東側立面図	1:100	1955	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	543×786
3. 矩計図	1:20	1955	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	537×790

国立西洋美術館｜1959年｜ル・コルビュジエ、坂倉準三、前川國男、吉阪隆正｜東京都台東区

1. 各階平面図（基本設計図）	1:200	1956	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	838×1062
2. 断面図（基本設計図）	1:50	1956	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	827×1438
3. 二階平面図	1:100	-	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	585×834
4. 断面図	1:100	-	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	583×837

第2章　素材・技術からの課題の克服　1950年代後半–1960年代

島根県立博物館（現・島根県庁第三分庁舎）｜1959年｜菊竹清訓｜島根県松江市

1. 一般図	1:200	1957	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	542×800
2. 立面図	1:100	1957	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	549×803
3. 矩計図	1:50	1957	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	567×818
4. 矩計図（三列架構）	1:33	1957	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	570×820
5. 照明器具　詳細図	1:10 1:5 1:2	1957	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	568×824
6. ルーバーウォール　詳細図	1:10	1957	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	568×818
7. スケッチ	-	-	鉛筆、トレーシングペーパー	524×577
8. スケッチ	-	-	鉛筆 色鉛筆 インク、トレーシングペーパー	580×743

畠山美術館（計画案）｜1961-1963年｜菊竹清訓｜-｜

1. 一般図	1:200	1961	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	534×791
2. 矩計図	1:50	1961	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	535×788
3. 平面図	1:100	1962	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	537×795
4. 矩計図	1:50	1962	鉛筆 色鉛筆、トレーシングペーパー	536×794

佐賀県立博物館｜1970年｜高橋晟一／第一工房, 内田祥哉｜佐賀県佐賀市

1. 配置図	1:500	-	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	595×840
2. 三階床壁PC版リスト	1:100	1969	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	545×800
3. 一階平面図	1:200	1968	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	405×560
4. 三階平面図	1:200	1968	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	405×553
5. 東側立面図	1:200	1968	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	398×550
6. 断面図	1:200	-	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	398×552
7. 詳細図（PC床版、柱頭部）	1:10	1969	鉛筆、トレーシングペーパー	555×802
8. 詳細図	1:10	-	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	587×837

佐賀県立博物館構造設計図｜1970年｜木村俊彦｜佐賀県佐賀市

1. 三階床伏図	1:100	-	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	550×800
2. PC格子梁　詳細図	1:30 1:10	-	鉛筆 色鉛筆 インク、トレーシングペーパー	550×800
3. PC柱　詳細図	1:10	-	鉛筆、トレーシングペーパー	552×800

EXPO'70 富士グループパビリオン｜1970年｜村田豊｜大阪府吹田市

1. 断面図	1:200	1968	青焼、トレーシングペーパー	596×848
2. 妻部　構造図	1:100 1:30 1:20	1969	鉛筆、トレーシングペーパー	546×800
3. 平面図（ピア・ガーデン計画案）	1:100	-	鉛筆、和紙	428×613
4. 空気膜構造スケッチ（ピア・ガーデン計画案）	1:50	-	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	422×596

日本万国博覧会電力館｜1970年｜坂倉準三建築研究所｜大阪府吹田市

1. 南側立面図	1:100	1968	鉛筆 インク、マイラーフィルム	552×801
2. 断面図	1:100	1968	鉛筆 インク、マイラーフィルム	550×803

第3章　地域のミュージアムへ：風土 / 伝統、大屋根　1970年代

千葉県立美術館｜1974年｜大高正人｜千葉県千葉市

1. 透視図	-	-	インク 色鉛筆、トレーシングペーパー	625×879
2. 一階平面図	1:200	1972	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	595×841
3. 立面図	1:200	1972	鉛筆 色鉛筆 インク、トレーシングペーパー	595×841
4. 大展示室　矩計図	1:20	-	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	595×841

群馬県立歴史博物館｜1979年｜大高正人｜群馬県高崎市

1. 配置図	1:500	-	インク フィルム、トレーシングペーパー	637×1681
2. 一階平面図	1:200	1977	青焼 インク、トレーシングペーパー	601×851
3. 中庭　平面詳細図	1:50	1978	鉛筆 色鉛筆 インク、トレーシングペーパー	601×851
4. ホール　断面詳細図	1:50	1977	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	594×845
5. 断面図	1:200	1977	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	595×838

第4章　個性的なミュージアムへ：親自然、局所、世界風景　1980年代

末田美術館｜1981年｜原広司＋アトリエ・ファイ建築研究所｜大分県由布市

1. 一階平面図	1:30	-	鉛筆、トレーシングペーパー	593×837
2. 二階平面図	1:30	-	鉛筆、トレーシングペーパー	593×837
3. 南側立面図	1:30	-	鉛筆、トレーシングペーパー	593×832
4. 断面図	1:30	-	鉛筆、トレーシングペーパー	418×593
5. スケッチ	-	-	インク、トレーシングペーパー	417×2124
6. スケッチ	-	-	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	417×580
7. スケッチ	-	1984	鉛筆 色鉛筆、トレーシングペーパー	417×590
8. スケッチ	-	1984	鉛筆、トレーシングペーパー	417×519

田崎美術館｜1984年｜原広司＋アトリエ・ファイ建築研究所｜長野県軽井沢町

1. A棟　平面図	1:50	-	鉛筆、トレーシングペーパー	592×837
2. A棟　矩計図	1:50	-	鉛筆、トレーシングペーパー	593×837
3. 断面図	1:50	-	鉛筆 色鉛筆、トレーシングペーパー	593×837
4. B棟　立面図	1:50	-	鉛筆 色鉛筆、トレーシングペーパー	591×837
5. スケッチ	-	-	鉛筆、トレーシングペーパー	340×418
6. スケッチ	-	-	鉛筆 色鉛筆、トレーシングペーパー	340×590
7. スケッチ	-	-	鉛筆、トレーシングペーパー	423×594
8. スケッチ	-	-	鉛筆、トレーシングペーパー	418×1153
9. スケッチ	-	-	鉛筆 色鉛筆、トレーシングペーパー	418×595
10. スケッチ	-	-	鉛筆 色鉛筆、トレーシングペーパー	419×598

飯田市美術博物館｜1989年｜原広司＋アトリエ・ファイ建築研究所｜長野県飯田市

1. 一階・二階平面図	1:200	-	インク、トレーシングペーパー	593×840
2. 市民ギャラリー　平面詳細図	1:50	-	鉛筆、トレーシングペーパー	592×837
3. 北側立面図	1:100	-	鉛筆 色鉛筆、トレーシングペーパー	592×835
4. 東側・西側立面図	1:100	-	鉛筆、トレーシングペーパー	592×837
5. 矩計図	1:30	-	鉛筆、トレーシングペーパー	592×837
6. メインロビー　展開図	1:50	-	鉛筆 色鉛筆、トレーシングペーパー	592×837
7. スケッチ	-	-	鉛筆 色鉛筆、トレーシングペーパー	591×1447
8. スケッチ	-	-	鉛筆 色鉛筆、トレーシングペーパー	419×593
9. スケッチ	-	1987	鉛筆 色鉛筆、トレーシングペーパー	420×590

【展覧会】
『ミュージアム 始原からの軌跡：
1940年代－1980年代』
主催：文化庁
協力：公益財団法人東京都公園協会
会場：文化庁国立近現代建築資料館
展覧会担当：
川向正人（主任建築資料調査官）、
遠藤康一（研究補佐員）、
木下紗耶子（研究補佐員）
会期：2020年10月1日（木）～11月15日（日）
（開催日数46日間）
入場者数：3,769人

【制作】
会場設営：株式会社芸宣
会場グラフィックデザイン：
西脇和馬（株式会社 Echelle-1）、
株式会社ラピス・ラズリ
照明：合同会社サムサラ
会場計画：遠藤康一

【図録】
発行・監修：文化庁
編集：文化庁国立近現代建築資料館
編集協力：勝原基貴（千葉大学特任研究員）
デザイン：日向麻梨子（オフィスヒューガ）、
下田泰也＋西脇和馬（株式会社 Echelle-1）
翻訳：株式会社フレーズ・クレーズ
印刷・製本：株式会社マップス